

時間のなかの都市

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授 いとう たけし 伊藤 毅

ガジュマルの生命力

台湾台南市の安平(Anping)に多くの観光客を集める特異な建築がある。「安平樹屋」である。煉瓦倉庫がガジュマルの木によって丸ごと呑み込まれてしまったかのごとき奇観は迫力満点で、穏やかな気候の日本に育ったわれわれにとって、南国の木の生命力の凄さを思い知らされる(写真-1)。

ガジュマルは中国語で「榕樹」と呼び、熱帯雨林帯で育つ巨木として知られる。中国雲南のミャンマーとの国境地帯のタイ族保護区にガジュマルに併呑された塔があることはよく知られているし、カンボジアのアンコール・ワット遺跡群のひとつ、タ・プロームの遺跡保存の脅威となっているのが、やはりこのガジュマルである(カンボジアではこの木をスポアンと呼ぶ)。しかしガジュマルは台南の人々にとっては海風から人々の生活を守り、強い日差しを遮り心地よい日陰を提供する木として親しまれてきた存在である。台南の伝統校である国立成功大学のキャンパスには巨大なガジュマルの木が2本屹立し、学生や市民の憩いの場となっている、大正12年、昭和天皇が皇太子時代にお手植えされたものである(写真-2)。

安平樹屋の履歴は以下のものである。この建物群は元来、イギリス商社「徳記洋行」の敷地内に建てられた倉庫で、当時の輸出品、樟脳、砂糖などが保管されていた。日清戦争後台湾が日本に割譲され、日本政府が商品取引を独占するようになり、徐々にヨーロッパ系の外資商社が撤退を余儀なくされる。最後まで台南に残っていた徳記洋行の商館(写真-3)と倉庫もついに大日本塩業会社の手に落ちることになる。そして安順塩田で作られた塩がこの倉庫に貯蔵されていた。しかし、第2次大戦が終わると、当地での塩業は衰退の一途をたどり、建物はそのまま放棄され半世紀以上の時間が経過した。その間、庭に植えられていたガジュマルの木が倉庫の建物を徐々に浸食し、屋根を突き破った木は建物内部へも触手を伸ばし、結果として有機体である植物と無機



写真-1 安平樹屋



写真-3 旧徳記洋行

質の建物がまるで共棲するかのような「樹屋」という不思議な空間が現出することになった。

2002年、この場所が芸術家のイベント・スペースとして利用されたことが、この建物を一般に知らしめる大きなきっかけとなった。イベントの終了後、この地が「安平港国家歴史風景区」に指定され、2004年に公開を目的に安平樹屋再利用のためのコンペが開かれた。このコ



写真-2(左) ガジュマルの巨木
写真-4(右) 樹屋を縫うボードウォーク

ンペを制した新進気鋭の建築家、劉國滄(Liu Kuo-Chang)氏の案にもとづいて、整備されたのである。隣の商館も公開され、安平の開拓時代の歴史を展示しているが、観光客には概して不人気なようで、一方の樹屋の方は子ども連れの観光客で賑わっている。

劉氏のコンセプトはシンプルである。この樹屋には一切手を加えない。そのかわり、建物の外周・内部を縫うよう

にボードウォークを巡らせる。観客は劉氏の設定したボードウォークと階段からなる経路を進むことによって、樹屋のさまざまな表情のシークエンスを楽しむことができる。したがってプログラムのキモは経路をどうデザインするかにあって、その巧妙に設定された経路のクールさと、いまにも動きだしそうな樹屋のダイナミズムの静動の対比が鮮やかである(写真-4)。

宙づりの風景

この安平樹屋を見に行こうと思い立ったのは、それに先だって台南市で若者が集うお洒落なスポットがあると聞いたからだ。台南市中西区正興街。台南市の都市計画で道路が拡幅され近代的なショッピングモールができるはずであったが、急速な経済的冷

はその無残な表情をさらけ出していた。台南市にとっていずれはなんとかしなければならぬ問題地区であったといえる。

ここに目をつけた劉氏は切り取られた空き家を買取り、ここにアトリエ「打開聯合工作室(United-Opening Architects)」を構える。まるで時間を冷凍保存するかのように建物の無残で中途半端な姿をそのまま残し、そのかわり壁一面に鮮やかなブルーを塗り、これをキャンバスとして白線で一点透視図のバーチャルな室内空間を描いた(藍晒牆、blue-print architecture)。家具や額縁、時計などの調度品が壁からぶら下げられる(写真-5)。実際の室内の半分は吹抜のある現代的なカフェになっていて、針金でアウトラインだけ示した家具が小屋裏からつり下げられている。時間的にも空間的にも「宙づり」状態を独創的なやり方で表現したのである。その結果、この一帯は若者たちの間でお洒落な場所として一躍有名なスポットとなり、周辺にもいい波及効果を生んでいる。劉氏はまだまだ国際的には無名に近い存在であるが、1998年国立成功大学大学院を修了し、2006年秋のヴェネツィア・ビエンナーレには台湾を代表する建築家として選出されるほどの実力派で、上記の安平樹屋は彼の代表作としてよく知られている。彼にとって時間をいかに建築的にデザインするかが目下のところ重要なテーマとなっている(打開聯合工作室ホームページ: <http://outstudio.com.tw/>)。



写真-5 藍晒牆

島に移す。その新しい拠点となったのが安平であった。したがって安平はオランダ人による台湾島進出の最初の足跡をしるした地として歴史にその名を残すことになる。その拠点的な施設が安平古堡で、オランダが台南を首都として台湾を治めていた時期

ヨーロッパの足跡

安平には海に面した港としての自由な気風がいまなお横溢している。そうした気風が安平樹屋のような、ある意味で大らかなプロジェクトを可能にしたのではないかと思われるのである。自由で開放的な空気は安平が海外との窓口になっていた歴史に起源があるだろう。

台湾そのものがヨーロッパ人にはじめて知られたのは、16世紀中頃ポルトガル船がこの近辺を通過し、緑に囲まれた美しい島を発見したことに遡る。しかしポルトガル人はわずかな貿易をしたのみで、台湾を植民地化することには興味を示さなかった。台湾を本格的に植民地経営しようとしたのはオランダであった。

オランダ東インド会社は最初、明の支配下にあった澎湖島を占拠し、東アジア貿易の足がかりとした。この澎湖島はしかし明にとっても海上交通の要衝であったため、1624年この領有をめぐって戦争が勃発する。オランダは澎湖島に固執することは得策でない判断し、明と和議をかわしたうえで、拠点を台湾



写真-6 安平古堡

の軍事要塞(熱蘭遮城Zeelandia)である。現在の安平古堡は、時代ははるかに下って日本統治時代に税関の宿舎として修復されたものであるが、一部オランダ時代のレンガの城壁が保存されている(写真-6)。

オランダの台湾統治は西欧によるアジアの植民地支配という負の側面をもつ一方で、台湾のその後の発展の一大契機となったという点で、プラスの評価も積極的に行われている。すなわち、それまで先住民による小規模な原始共同体の集まりに過ぎなかった台湾がオランダ統治によってはじめて系統的な地域

支配が成立し、素朴な漁業や農業にかわって貿易や商業にたずさわる商人集団も形成された。また植民地経営の大規模化にともなって、多くの漢人が労働力として中国本土から台湾に流入した。こうした漢人系移民のなかから植民地支配に抵抗する勢力が育つようになり、1652年、郭懷一を中心とする漢人系移民の大規模な反乱が発生した。この反乱はただちに鎮圧されたが、1661年にはまたしても鄭成功をリーダーとする漢人グループの激しい攻撃を受けた。かくして翌1662年最後の砦である熱蘭遮城が陥落し、37年に及ぶオランダ支配に終止符が打たれる。ここに中国人最初の鄭氏による政権が樹立されたのである。

台湾には日本統治時代の建築が数多く残されているが、ヨーロッパの足跡はさほど目立たない。そうしたなかで安平はやはり特異な位置を占める。先にみたイギリス商館徳記洋行、オランダの軍事要塞熱蘭遮城(現・安平古堡)に加えて、ドイツ商館東興洋行の遺構がある。この建築は1864年につくられたもので19世紀のものであるが、煉瓦積の連続アーチ開口をもつペランダを正面に据えた本格的な洋風建築である(写真-7)。このような諸外国の貿易商人の居館が安平には建設され、港には各地からやってくる船が輻輳したと伝える。

台湾には日本統治時代の建築が数多く残されているが、ヨーロッパの足跡はさほど目立たない。そうしたなかで安平はやはり特異な位置を占める。先にみたイギリス商館徳記洋行、オランダの軍事要塞熱蘭遮城(現・安平古堡)に加えて、ドイツ商館東興洋行の遺構がある。この建築は1864年につくられたもので19世紀のものであるが、煉瓦積の連続アーチ開口をもつペランダを正面に据えた本格的な洋風建築である(写真-7)。このような諸外国の貿易商人の居館が安平には建設され、港には各地からやってくる船が輻輳したと伝える。





写真-7 旧東興洋行

伝統の町

安平には港町特有のさまざまな文化の混肴が見られるが、その一方で伝統的な都市居住や商業の集積も長い時間をかけて成熟していった。安平古堡の東、古堡街をはさんで隣にあるのが安平でもっとも有名な商店街、延平老街である。延平老街はオランダ統治以降、安平の貿易の中心として、また唯一の商店街として現在まで継承されてきた(写真-8)。かつての延平老街は清時代の規制により幅わずか2~3メートルに制限されていたが、1994年住民からの強い希望により道路の拡張工事が行われた。この拡張工事には伝統的都市空間の価値を主張する有識者や研究者から反対の意見も少なくなかったが、住民側の意向がそれに勝り工事は断行されたが、拡張工事のあと反省気運が起こり、延平老街と平行する中興街、効忠街はそのままの街路幅が保存されてい

る。狭い街路には多種多様な店舗が間口を接してたち並び、庇の下には食べ物や商品が溢れんばかりにはみ出している。

そして延平老街の北側には、今でも庶民が住んでいる一画があり、細い路地が網目状に広がっている。安平の伝統住宅は主屋と付属屋がL字形でつながる形式が一般的で、建物の背はきわめて低く、庭を取り囲むようにして塀が巡る(写真-9)。住宅の正面には門が構えられるが、屋根付きの門の場合、これもタチが低くかがむようにして入る。中国の四合院をさらに簡略化し、全体として小規模化したのが安平の住宅のプロトタイプのようなものである。

さまざまな時間

都市にはさまざまな時間が流れている。安平樹屋のガジュマルは放置された廃屋の時間の経過を可視化していたし、道路拡張のために分断された家屋の

写真-8 中興老街



部の時間(東京大学大谷研究室訳、鹿島出版会、1974年)という優れた都市論を世に問うた。リンチといえば『都市のイメージ』が有名で、建築を学ぶ人々にとってバイブルのような存在であるが、一方『時間の中の都市』はいまやほとんど忘れ去られていて、再版はおろか古書で見つけることさえ難しい。しかし本書は都市に流れる時間という存在をはじめて問題化した重要な論文であったといってさしつかえない。台南の安平はこの書の存在をあらためて思い出させてくれる興味深い町であった。

側壁は都市の時間の停止を物語っていた。そして町に点在する歴史時代のモニュメントは正史の時間を刻み、伝統的な街区には正史に登場しない脈々とした庶民の時間が堆積していた。わたしたちがはじめて見ず知らずの都市を訪問する時、このさまざまな時間に感応しながら対話を始めなければならない。

かつてケヴィン・リンチ (Kevin Lynch) は『時間の中の都市 - 内部の時間と外



写真-9 安平の伝統住宅